



TITLE:

# 京都大学植物園内遺跡BD35の調査と移築

AUTHOR(S):

京都大学埋蔵文化財研究センター

---

CITATION:

京都大学埋蔵文化財研究センター. 京都大学植物園内遺跡BD35の調査と移築. 1977

ISSUE DATE:

1977-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/151828>

RIGHT:

# 京都大学植物園内遺跡BD35の調査と移築

昭和52年9月

京都大学埋蔵文化財研究センター

# 京都大学植物園内遺跡BD35の調査と移築

## 調査の経過

昭和48年度、京都大学北部構内の理学部植物園敷地に理学部ノートバイオロン実験装置室（植物生態研究施設）を新営する工事が予定された。同敷地は過去の調査によって遺跡の存在が予想されていたため、京都大学が主体となり小林行雄講師（当時）の指導のもとに中村徹也助手（当時）が発掘調査を担当した。

同地域の層位は黄砂層によって大きく上層群と下層群に区別できるため、昭和48年7月から同9月にかけての第一次調査によって上層群の発掘調査を行なった。その結果、平安時代を中心とする遺物と平安後期の溝状遺構が出土したが、遺物の多くは細片で建築遺構などは出土しなかった。

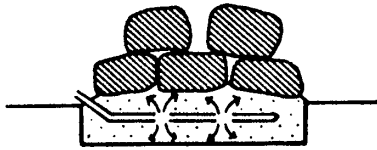
次いで昭和48年9月から同12月にかけての第二次調査で下層群を発掘調査した。その結果、黒褐色土層（先史第1層）から弥生土器と晩期縄文土器が少量出土し、黄褐色・暗褐色土層（先史第2・3層）からは縄文時代後期前葉を中心とする土器と石器が多量に出土した。また暗褐色土層（先史第3層）下面からは粗製の甕棺7個と配石遺構9基が出土した。この中には配石下に甕棺がある配石遺構一基が含まれている。

このような甕棺・配石遺構が完全な形で出土した例は西日本では極めて稀れである。また土器や石器は当時の人々の生活や、東日本や瀬戸内地方との関係を解明するための貴重な資料となるものであったので、調査担当者は遺跡を保存する必要があることを明かにした。それを受けた京都大学は「遺跡保存調整委員会」を開いて協議を重ねた結果、甕棺・配石遺構を移築して保存することを決定した。これに従って昭和49年7月から同10月にかけての第三次調査で全面調査を行なった後に甕棺・配石遺構を取上げ、昭和51年度に同遺構を東に隣接する理学部植物園敷地に移築復元した。

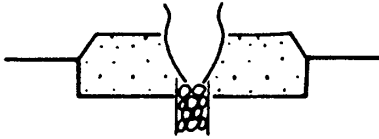
## 移築の工程

移築の作業としては、1）遺構取上げ作業、2）受入準備作業、3）移築作業、があった。

遺構取上げ作業　配石遺構の取上げは次の工程をふんだ。1）配石のまわりに杭を打ち、10分の1の図面に配石と杭を記入する、2）配石のまわりに杭を含み、底のレベルがそろった溝を掘る、3）溝に石膏を流し込み配石の側面の型を取る、4）樹脂で配石の各石を接着する、5）石の上に銀紙を貼りつけ、樹脂で配石の上型をとる、6）石にナンバーをうつ、7）取上げ状況の写真を撮る。以上の作業は初めての試みであったためいくつかの失敗を犯した。石膏下型は補強の不充分さと風化でボロボロになり、樹脂による石のブロック化は石膏下型との接合を阻害した。上型は役に



配石の固定



墓棺の固定

挿図1 移築模式図

立たず、ナンバーはマジックインクでうったため移築後消し取ることができなくなった。また取上げ写真は撮影位置と角度を記録していなかったため正確さを欠いた。以上のように各工程の実施において技術的な問題は数多くあった。

**受入準備作業** 移築の場所は遺跡の東に隣接する植物園内の一角が提供された。移築に際して立木を切らないですむように立木の位置を測量し、立木の位置図と配石および墓棺の平面図を重ねあわせ移築の位置を決定した。移築現場に調査中用いた遺構の実測基準線を復元し、配石移築の時、各石の高さを調整するた

めの水準点を設置した。墓棺の移築は複製品を用いるため専門業者に複製を依頼した。

**移築作業** 配石の移築は次の要領で行なった(挿図1)。1) 各配石の設置場所に配石が入る程度の長方形の穴(深さ約30cm)を掘り、穴の底および側面に後に注入する樹脂が漏れないように樹脂を塗布して固める、2) 少量の砂で樹脂を注入するためのパイプを埋めてから、砂をいっばいに入れる、3) 各石を遺構平面図に従って復元設置する。基準線からの距離と高さを確認しながら、取り上げ時の写真を参考にして石を組み上げる、4) あらかじめ砂の中に埋めておいたパイプに樹脂を注入する、5) 樹脂が砂表面に吹き出すようになった段階で注入をやめ地表面より樹脂を散布する。この時同時にふるいにかけた細かい土をかけて砂の表面を化粧する。この化粧の上から更に樹脂を散布して土を固定する。樹脂が硬化することによって配石は地面に固定される、6) 石の上に重なる石は別の樹脂を用いて固定する、7) 遺構取り上げの時に用いた樹脂やマジックインクを可能な限り除去し、風化しやすい石の表面に風化止めの処理を施す。

**墓棺の移築**は次の要領で行なった(挿図1)。1) 各墓棺設置場所に径1.0～1.5m、深さ約20cmの円形の穴を掘り、この中央に更に深い穴を掘り径20cm長さ40cmの塩化ビニール製の水抜き用パイプを埋める。パイプの中には水が抜けやすいように小石をつめる、2) パイプの上に墓をのせ穴の底、側面、墓とパイプの継目から、後に注入する樹脂が漏れないように急結セメントを用いて壁をつくる、3) 穴の中に砂を入れ墓棺が目立つように地表面から砂を約10cm盛りあげ、その上に墓の上部を10cm露出させた、4) 砂の上から樹脂を散布する。樹脂の膨張が墓を破損しないように促進剤は混入しない、5) ふるいにかけた土を散布し更にその上に樹脂をまいて固定する、6) 墓の中に底から約10cmの高さまで砂を入れる。雑草が生えないように、この中には土を入れない、7) 配石に伴う墓棺については窪地に埋める場合が多いため墓の周囲から水が抜けるよ

うに工夫する。壺を覆う石は取りはずせるようにする。

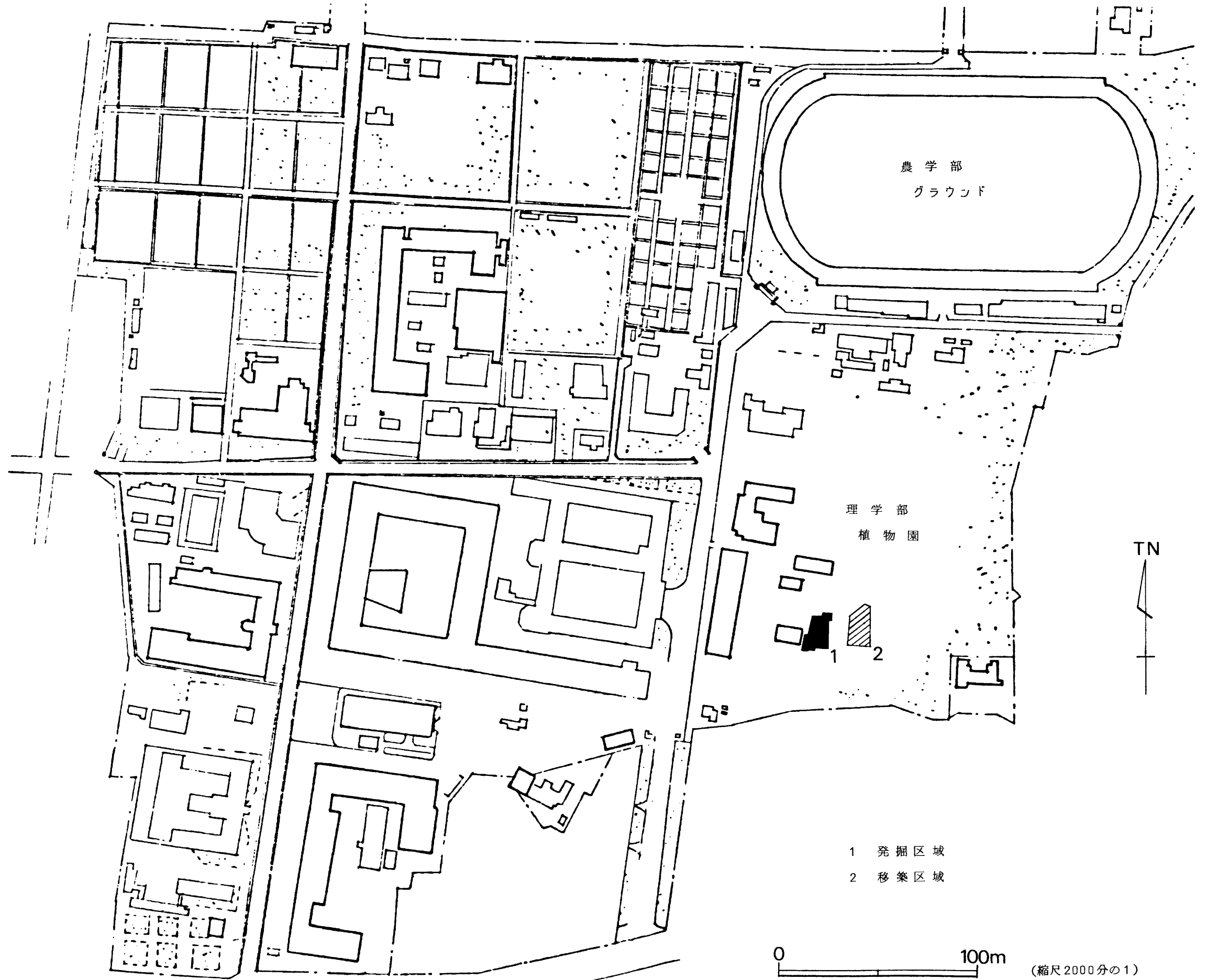
以上の工程で移築作業を行なったが、樹脂は砂および化粧土を固めるためのタックス、石と石を固定するためのエポキシ、風化止めのMD7の三種類を用いた。

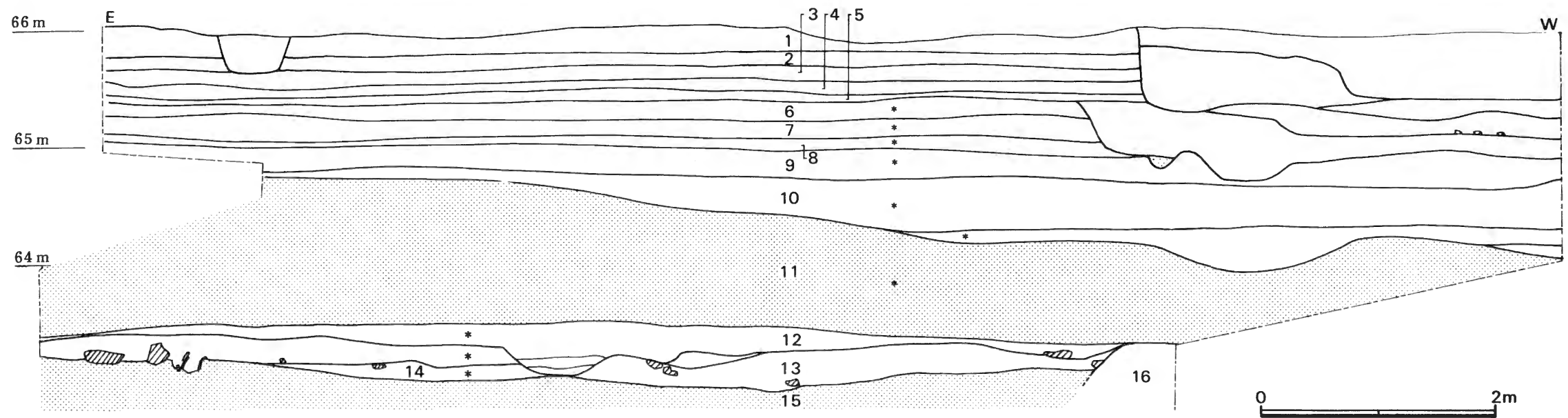
最後に遺跡の表示板とフェンス、入口を設置し作業を完了した。

移築した本遺跡は今後、縄文時代の研究だけでなく、広く歴史教育の場として活用されることを願っている。

移築に際しては京都大学名誉教授小林行雄氏、故小橋敏夫氏から指導と助言を頂いた。また理学部事務室・附属植物生態研究施設・植物園、施設部などの関係諸機関及び工事を施工した大垣セメントの久保哲正氏から多くの協力を受けた。

図 1 遺 跡





\* 印 花粉分析用の土採集層

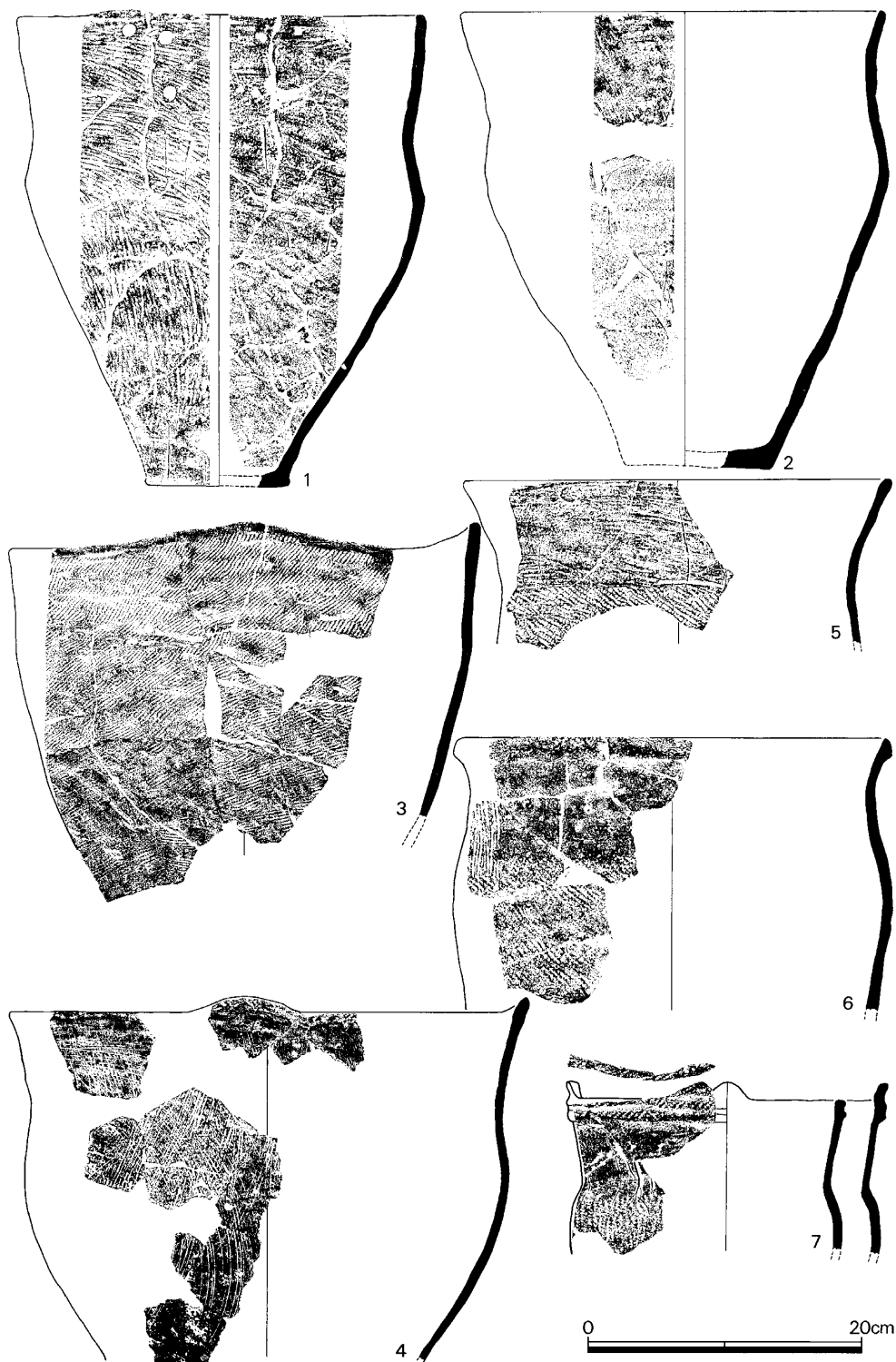
- |          |                  |
|----------|------------------|
| 1 表土層    | 9 赤褐色土層Ⅲ         |
| 2 床 土    | 10 黒色砂層 西方下部黒色粘土 |
| 3 灰褐色土層  | 11 黄色砂層          |
| 4 赤褐色土層Ⅰ | 12 黄褐色粘質土層       |
| 5 褐色土層   | 13 暗褐色粘質土層       |
| 6 赤褐色土層Ⅱ | 14 黒褐色粘質土層       |
| 7 暗褐色土層  | 15 青色又は黄色砂層      |
| 8 灰褐色土層  | 16 赤色酸化鉄付着砂層     |

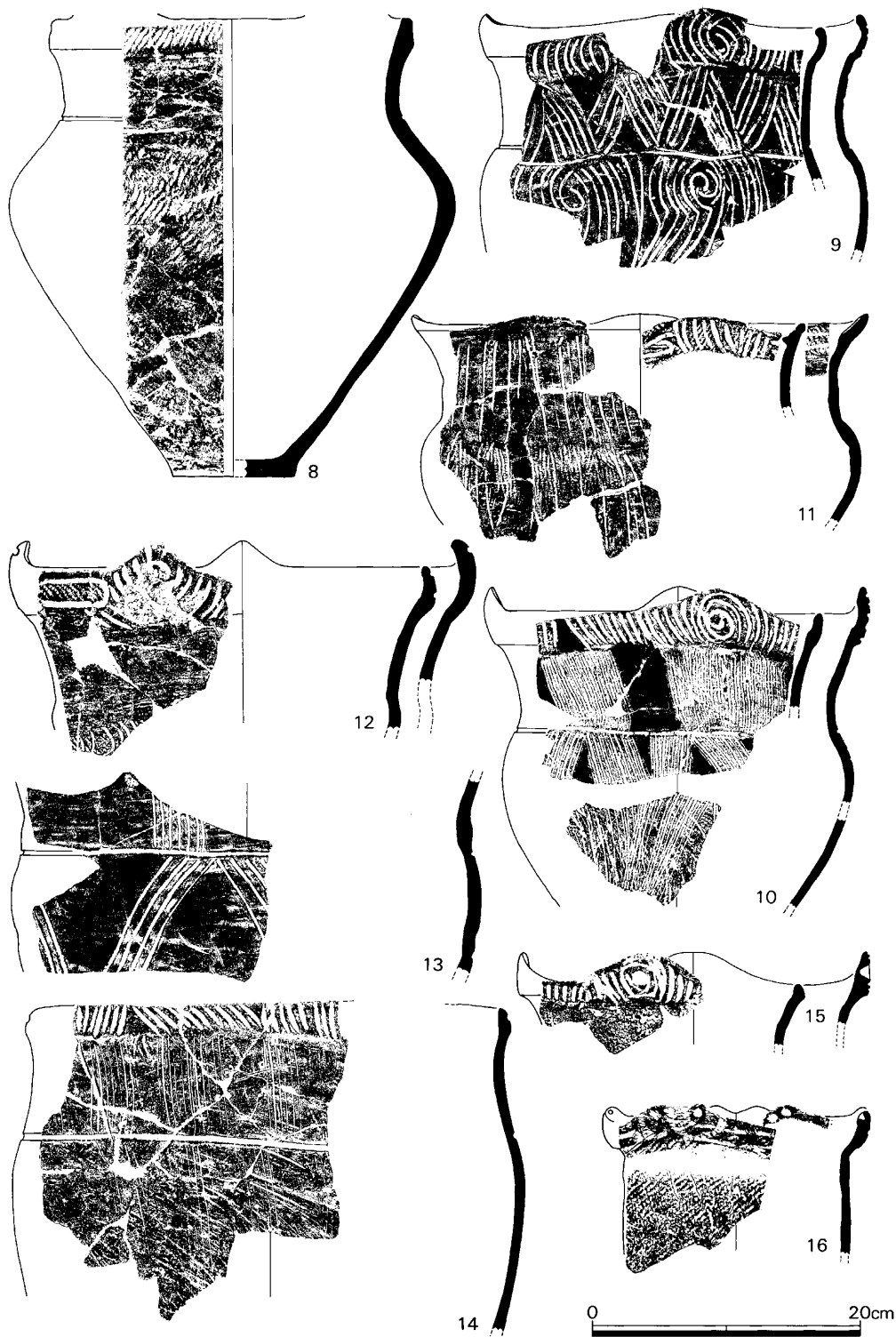
図 3 甕棺・配石遺構





図 4 縄文土器





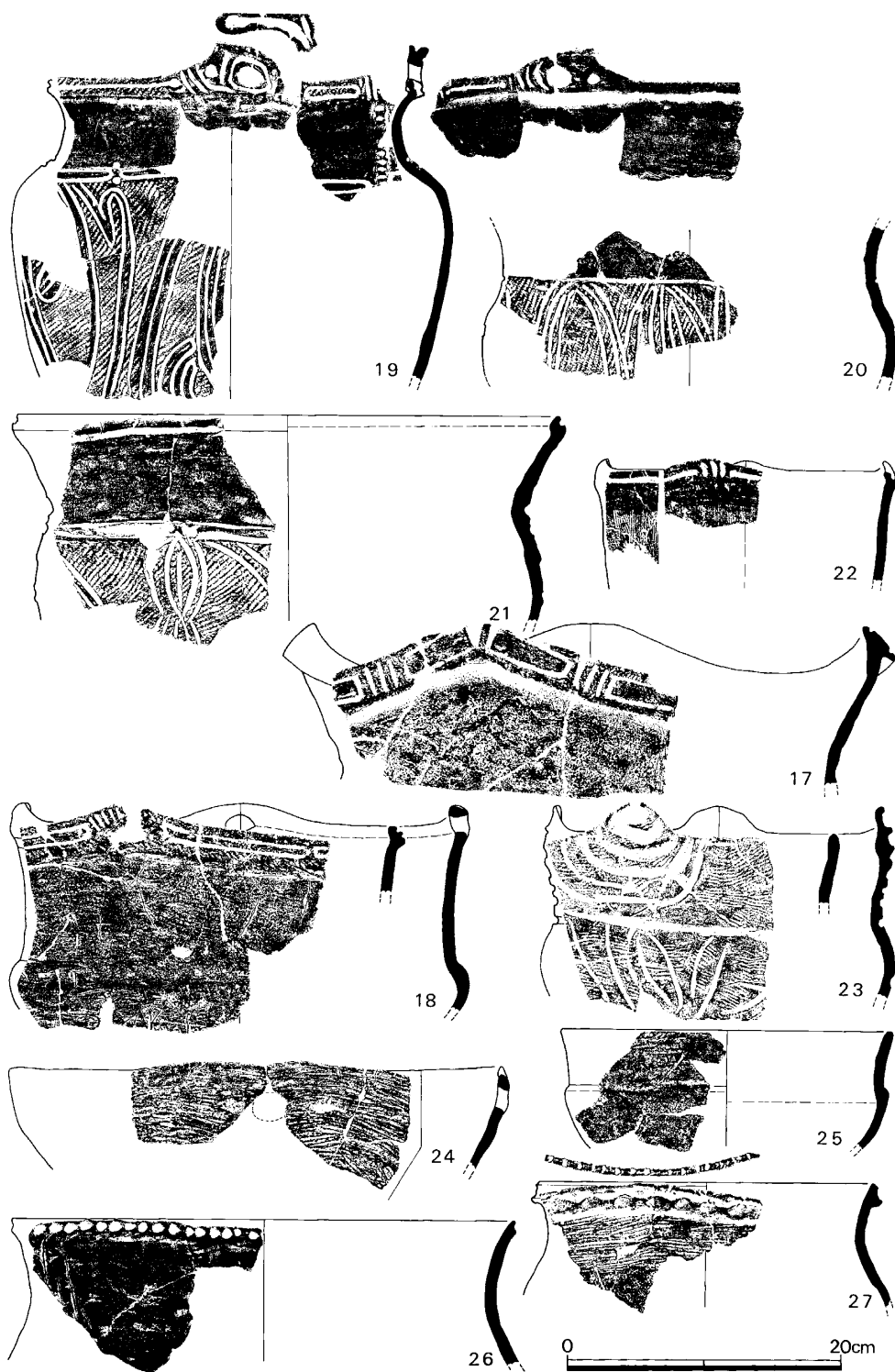


图 7 绳文土器

